

新しい日本語研究 を学ぶ人のために

玉村文郎[編]



対照研究と日本語学
日本語と外国語との対照
言語研究の新しい広がり

新しい日本語研究 を学ぶ人のために

玉村文郎〔編〕

新しい日本語研究を学ぶ人のために

1998年10月10日 第1刷発行
2001年4月10日 第2刷発行

定価はカバーに
表示しています

編者 たま ひら みみ お
玉 村 文 郎

発行者 高 島 国 男

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56 〒606-0031
電話 075(721)6506(代)
振替 01000-6-2908

© 1998 F. TAMAMURA Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします (共同印刷工業・藤沢製本)

ISBN4-7907-0726-1

まえがき

国際化と情報化の中で、日本語の世界も新しい局面を迎えています。本書は、このような時代の要請にもとづいて刊行されたものです。国際舞台での活躍の場が広がった日本語は、今や、重要なコミュニケーションの言語として確固たる地位を占めています。このような現状において、日本語の研究はますます重要なものとなり、日本語教育も、増えつづける学習者の多様なニーズに適切に対応することを求められています。

事物の本質は、その事物だけを見ていたのではつかめないことが多いものです。日本語の場合もその例外ではありません。

本書の第Ⅰ部はそのような観点から書かれたもので、日本語を世界の諸言語の中に置いたとき、どのような特性が浮き彫りにされるのか、多くの例を挙げながら考察されています。

第Ⅱ部では、12言語のそれぞれと対照することにより、日本語と各言語との相違点や類似点が詳細に分析・考察されています。このような日本語の対照研究は、単に日本語の特徴を明らかにするだけでなく、教育面にも寄与するところが大きいと言えます。日本語の学習者は、数が増えるにつれて、多様化が進んでいます。そのことは、学習者の母語の種類が以前とは比較にならないほど多くなっていることからだけでも明らかです。今日ほど、日本語と外国語との対照研究の必要性が感じられる時代はありません。

現代社会は科学技術の急速な発展の影響を受けています。機械化や電子化が進み、マスメディアも発達しました。コンピュータを利用した研究、コンピュータに情報を乗せるための研究が登場しました。また、社会や人間関係の変化にともない、日本語も日本語の運

用法も変容を見せつつあります。言語を使う主体である人間の認知能力やそのプロセス、機械の言語認識力などの研究も進められています。第Ⅲ部では、このような分野に関係の深い研究領域について考察がなされています。

このような3部から成る本の編集は、先例もなく容易な事業ではありませんが、幸い第一線で活躍されている各分野・各領域の専門家の協力を得て、ここに新機軸による充実した一書を編むことができました。

本書が、広く日本語に関心をもつ人々、とりわけ日本語の研究や教育に志す人々の良き友、良き師となれば幸いです。

なお、先に刊行され、多くの読者に歓迎されている『日本語学を学ぶ人のために』（世界思想社）を併せ読まれることをお勧めします。日本語と日本語学の全体の把握をいっそう確かなものにしてくれるはずです。

ご多忙の中、快くご執筆をご承諾くださった先生方に心から感謝申し上げます。

また、万般にわたりお世話になった世界思想社編集部の久保民夫氏にあつくお礼申し上げます。

1998年 夏

玉 村 文 郎

《目 次》

まえがき

序 論	(玉 村 文 郎) 3
-----------	-------------

1 はじめに——所変われば ことばも変わる	3	2 言語研究の流れ	4
3 対 照 研 究	6		

〈I〉 対照研究と日本語学

対照研究と日本語学	(玉 村 文 郎) 10
-----------------	--------------

1 日本語らしさ	11	のいろいろ 30
1.1 「雨が降る」をめぐる—— 現象文と格助詞「が」 11		1.12 「人をのろわば……」 ——接続語好き 32
1.2 「カリ」と「リカ」—— 音の単位・位置など 13		1.13 ワンワンからクッキリまで ——擬音語・擬態語 34
1.3 「イネ・コメ・メシ」と“rice” ——語の数と分布 14		1.14 「ただ酒を飲むな」 ——文字・表記 35
1.4 「プリーズ」と「フリーズ」 ——語の使用率 16		1.15 「ほととぎす平安城をす ぢかひに」——語順 38
1.5 「にやあ」は副詞か感動 詞か——品詞分類 19		1.16 「主よ、いずこに行きた もう」——敬語・待遇表 現 39
1.6 古池に飛び込んだ蛙は 何匹?——名詞の下位 分類 20		1.17 「ごぶさたしています」 ——省略されるもの 41
1.7 「百座の山」「台風3個」 ——助数詞 23		2 類型から見た日本語
1.8 使いにくい「あなた」 ——代名詞になりきらな い〈人代名詞〉 24		2.1 語 順 44
1.9 「有名だ」「システムティク だ」——形容詞の世界 26		2.2 後置詞(助詞)と修飾語 など 45
1.10 「なる」の活躍—— 動詞をめぐる 29		2.3 音の種類と数 45
1.11 「出る杭は打たれる」と 「雨に降られる」——受身		2.4 音の結合 46
		2.5 音と拍の使用率・出現 位置 46
		2.6 語 構 成 47
		2.7 語の長さ 48

〈Ⅱ〉 日本語と外国語との対照

第1章 日本語と英語……………(影山太郎) 58

- | | |
|---|--|
| 1 日英語の表現法 ……………58
2 意味構造と視座 ……………59
3 自動詞と他動詞の交替 ……64
4 英語の結果指向 ……………72
4.1 動きから結果へ 72 | 4.2 行為と結果の合成 75
4.3 場所と所有 76
4.4 経路前置詞における
意味拡張 78
4.5 中間構文 78 |
|---|--|

第2章 日本語とドイツ語……………(乙政 潤) 84

- | | |
|---|--|
| 1 日本語とドイツ語 ……………84
2 対照の尺度としての
パースペクティブ…………84
3 指 呼 ……………85 | 4 空間の指呼の対照の例 ……86
5 時間の指呼の対照の例 ……89
6 人や物の指呼の対照の例 …93 |
|---|--|

第3章 日本語とフランス語……………(田辺 保) 98

- | | |
|--|---|
| 1 発音と音声から ……………98
1.1 フランス語の特性 98
1.2 フランス語の発声法 99
1.3 母音と子音 99
2 語彙と文法 ……………101
2.1 語の意味(1)
— pièce など 101
2.2 語の意味(2)—mettre
など 102
2.3 語の意味(3)—生活習慣
の中の単語 103 | 2.4 冠詞について 104
2.5 総称の定冠詞 105
2.6 部分冠詞のことなど 106
3 文の構造 ……………107
3.1 基本的文型 107
3.2 名詞構文について 108
3.3 C'est...の意味 109
3.4 フランス語の「わたし」 110
3.5 『古都』と Kyoto 110
3.6 フランス語と日本語 112 |
|--|---|

第4章 日本語とスペイン語……………(大倉美和子) 114

- | | |
|--|--|
| 1 スペイン語について ……114
1.1 スペイン語使用圏 114
1.2 スペイン語の文字・
表記 115
2 日本語とスペイン語の対照 | ……………117
2.1 音韻・音声 117
2.2 形態・構文 119
2.3 語 彙 122 |
|--|--|

第5章 日本語とポルトガル語……………(河野 彰) 124

- | | |
|---|--|
| 1 はじめに……………124
2 ポルトガル語の音韻……………125
2.1 母 音 125
2.2 子 音 126 | 2.3 音節構造 128
2.4 ポルトガル語の
アクセント(強勢) 129
3 日本語との対照……………129 |
|---|--|

第6章 日本語とロシア語……………(石田 修一) 132

- | | |
|--|---|
| 1 文字・母音組織・子音組織
……………132
1.1 母 音 132
1.2 子 音 133
1.3 音節構造 133
1.4 アクセント 134
2 文法組織……………134
2.1 名 詞 134
2.1.1 ロシア語の格と
日本語の格 134 | 2.1.2 活動体・不活動体
範疇 136
2.2 動 詞 137
2.2.1 時制組織 137
2.2.2 アスペクト 138
2.2.3 運動の動詞 139
2.2.4 相(voice) 140
2.3 形 容 詞 141
2.4 語 順 141
3 語 彙……………142 |
|--|---|

第7章 日本語と中国語……………(興水 優) 146

- | | |
|---|--|
| 1 中国語のプロフィール……………146
1.1 中国語と漢語 146
1.2 共通語と方言 146
2 日本語と中国語……………147
2.1 日本語は中国語の
博物館 147
2.2 日中対照研究 148
3 漢字をめぐる諸問題……………149
3.1 中国の漢字 149
3.2 字体の統一 150
4 音声に関する諸問題……………151
4.1 音節の構成 151
4.2 声調言語 152
4.3 声母と韻母 153 | 4.4 音声の対照研究 153
5 語彙に関する諸問題……………154
5.1 漢字の渡来 154
5.2 漢字音と漢語語彙 155
5.3 和製漢語 156
5.4 漢語専門語彙の形成 157
5.5 漢語の語構成 158
6 文法に関する諸問題……………160
6.1 文法と語法 160
6.2 助詞をめぐる 161
6.3 「の」と“的” 162
6.4 主語と述語 164
6.5 場所詞と場所名詞 166
6.6 その他の問題 167 |
|---|--|

第8章 日本語とコリア語……………(泉 文明) 169

- | | |
|---|--|
| <p>1 はじめに……………169</p> <p>2 音声・音韻について……………170</p> <p> 2.1 母 音 170</p> <p> 2.2 半 母 音 170</p> <p> 2.3 子 音 170</p> <p> 2.4 長音と短音 171</p> <p> 2.5 有声音と無声音 171</p> <p> 2.6 平音・激音・濃音 171</p> <p> 2.7 反 切 表 172</p> <p> 2.8 音節構造と音声上の
 単位 172</p> <p> 2.9 開音節と閉音節 172</p> <p> 2.10 語頭の子音 174</p> <p> 2.11 語中の子音 174</p> <p> 2.12 無声歯摩擦音 174</p> <p> 2.13 有声歯摩擦音と
 有声歯摩擦音 174</p> <p> 2.14 連音化現象 175</p> <p>3 形態・構文について……………175</p> <p> 3.1 助詞(1)——疑問文の主題
 提示 175</p> <p> 3.2 助詞(2)——「～に会う」等
 の格助詞「に」 176</p> <p> 3.3 助詞(3)——「～になる」等
 の格助詞「に」 176</p> <p> 3.4 助詞(4)——格助詞「の」 176</p> <p> 3.5 授受動詞 177</p> <p> 3.6 待遇表現 178</p> <p> 3.7 漢語系の動詞と形容
 動詞 178</p> | <p> 3.8 「する」と「ならせる」 178</p> <p> 3.9 漢語系自動詞の
 能動態と受動態 179</p> <p> 3.10 「～について／関して」と
 「～に対して」 179</p> <p>4 語彙について……………180</p> <p> 4.1 固 有 語 180</p> <p> 4.1.1 衣類を着る時の
 表現 181</p> <p> 4.1.2 背たけの「高低」の
 表現 181</p> <p> 4.1.3 指示代名詞と遠称・
 近称 181</p> <p> 4.1.4 物事や動作の行き先
 を表す順番 182</p> <p> 4.1.5 「ある」と「いる」 182</p> <p> 4.2 漢 語 182</p> <p> 4.2.1 現在, コリア語で使
 われているが, 日
 本語では使われて
 いない語 183</p> <p> 4.2.2 日コ両言語の間で,
 意味・用法の異な
 る語 183</p> <p> 4.3 外 来 語 183</p> <p> 4.4 混 種 語 184</p> <p>5 文字・表記について……………184</p> <p> 5.1 文字種の体系 184</p> <p> 5.2 仮名とハングル 185</p> <p> 5.3 漢 字 186</p> <p> 5.4 表記規則 187</p> |
|---|--|

第9章 日本語とモンゴル語……………(今泉喜一) 191

- | | |
|--|---|
| <p>1 モンゴル語とは……………191</p> <p>2 モンゴル文字……………192</p> | <p>3 モンゴル語の音声……………193</p> <p>4 モンゴル語の文法……………195</p> |
|--|---|

第10章 日本語とベトナム語……………(土 岐 哲) 199

- | | |
|---|---|
| 1 日本語に移植された
ベトナム語……………201
2 音韻体系・音節構造……………201 | 3 アクセント……………204
4 イントネーション……………205
5 ま と め……………207 |
|---|---|

第11章 日本語とマレー・インドネシア語 ……(椎 名 和 男) 209

- | | |
|---|--|
| 1 はじめに……………209
1.1 ムラユ語・インドネシア
語・マレー語 209
1.2 インドネシア語の
国語化 210
2 文字表記……………211
2.1 インドネシア語とマレー語
のアルファベット 211
2.2 発音と綴字 212
2.2.1 母 音 212 | 2.2.2 二重母音 213
2.2.3 子 音 213
2.2.4 アクセントとイント
ネーション 214
3 文法と語彙……………215
3.1 マレー・インドネシア語
の文法 215
3.2 語順と構文 215
3.3 接辞の種類と機能 216 |
|---|--|

第12章 日本語とタイ語……………(松 井 嘉 和) 219

- | | |
|--|--|
| 1 タイ語の概観……………219
1.1 「タイ語」の範囲 219
1.2 音 声 219
1.3 文字表記 220
1.4 文 法 221
1.5 語 彙 221
2 日本語話者から見た
タイ語……………222
2.1 「タイ語」の範囲 222
2.2 音 声 222
2.3 文字表記 223
2.4 文 法 225
2.5 語 彙 228 | 3 タイ語話者にとっての
日本語……………229
3.1 「日本語」の広がり 229
3.2 音 声 229
3.3 文字表記 230
3.4 文 法 230
3.5 語 彙 231
4 タイ人と日本人の
コミュニケーション……………231
4.1 日常表現 231
4.2 誤解を生むあいさつ 232
4.3 寡黙の尊重とコミュニ
ケーション 233 |
|--|--|

〈Ⅲ〉 言語研究の新しい広がり

第1章 社会言語学……………(真田 信治) 238

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1 はじめに——社会言語学の
研究領域……………238 | 2.1 敬語の変遷 242 |
| 2 敬語行動の様相……………242 | 2.2 現代敬語の実態 246 |
| | 2.3 世界の敬語対照 248 |

第2章 認知言語学……………(山 梨 正 明) 251

——新しい言語科学の展望——

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1 はじめに……………251 | 参与者 258 |
| 2 認知のプロセスと
言葉の意味……………252 | 4.2 〈統合的〉認知と
〈離散的〉認知 261 |
| 2.1 ベースと
プロファイル 252 | 5 参照点能力と
アクティヴゾーン……………262 |
| 2.2 トラジェクターと
ランドマーク 254 | 6 イメージスキーマと
意味の主観化……………265 |
| 3 前景化・背景化の
認知プロセス……………256 | 6.1 スキーマの比喩的拡張
と価値付与 265 |
| 4 図と地／前景と背景の
反転……………258 | 6.2 イメージスキーマの
変換と認知的変容 269 |
| 4.1 セッティングと | 7 む す び……………273 |

第3章 計算言語学……………(中 野 洋) 277

- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1 計算言語学とは何か……………277 | 2.4.1 言語研究への利用 284 |
| 2 計算言語学の実例……………279 | 2.4.2 言語処理研究への
利用 285 |
| 2.1 索引の作成 279 | 2.5 言語理論の検証としての
コンピュータ利用 285 |
| 2.2 コンピュータによる
語の認定処理 281 | 3 国際的・学際的協同研究へ
……………287 |
| 2.3 語彙調査 282 | |
| 2.4 コーパスの利用 283 | |

第4章 機械認識と言語学……………(壇 辻 正 剛) 289

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 機械で言葉を認識する……………289 | 3 機械認識と語学教育……………295 |
| 2 音素と異音……………293 | |

●事項索引……………301

❖ 新しい日本語研究を学ぶ人のために ❖

序 論

玉村文郎

1 はじめに——所変わればことばも変わる

日本語の「湯」が英語では“hot water”と訳されることを知って、奇異な感じを受けた人がいるだろう。先に「水」は“water”だと習っているから、“hot water”なら「熱い水」となってしまっていて、「泉からわき、川を流れ、海にたたえられる、冷たい液体。(下略)」(『新明解国語辞典』第1版)というような日本人のもつ「水」の観念に一致しないからである。英語の“water”は0°Cから100°Cまでの液状の物質(“a transparent, odorless, tasteless liquid which constitutes rain, oceans, lakes, etc.”—*The Random House Dictionary*)を指すが、日本語の「水」は範囲が狭く、0°Cから35°CあたりまでのH₂Oを指すだけである。中国語の shuǐ (水) も“water”と同様で, rèshuǐ (热水) と liángshuǐ (凉水) の複合語をもつ。ところが、タイ語の “nám” はさらに範囲が広く、H₂O そのものである。つまり氷も

日本語	こおり	み ず	ゆ	ゆ げ
英 語	ice	water		steam
中国語	bīng(氷)	shuǐ(水)		(shuǐ)zhēngqì((水)蒸气)
タイ語	(nám khěŋ)	nám		(² ai nám)
	0°C		100°C	

“nám khěj”（水—固い）、湯気・水蒸気も“[?]ai náam”（ガス—水の）と呼ばれるからである。図示すると前ページのようになる。

しかし地球上の言語には、 H_2O を指すのに温度を基準にしないものもあって、アメリカのアリゾナ州に住むホピ族の言語では、天然・自然の水（雨水や海水など）か人間が手を加えた水（風呂の湯やプールの水など）かによって、まったく異なる語を用いている。このホピ語では、〈自然性〉を基準にして H_2O を2つに分けているのである。

個々の方言も1言語として捉えられる。「のこぎりをカッテキテクレ」ということばが「借って」ではなく「買って」と理解されて夫婦喧嘩になったという話がある。夫は徳島、妻は嫁いで日の浅い静岡の出身者であった。同じ日本人同士であっても、使う方言（言語体系）が異なれば、時に大きな誤解を生むことがある。「水」の例は語に関することであり、徳島の話は音と文法に関することである。

複数の言語を科学的に観察し比べ合わせることは、外国語を学ぶ際には大切なことである。まして言語教育者、翻訳・通訳を業とする人、異文化や民族学や人類学を研究する人には、きわめて重要なことである。

2 言語研究の流れ

近代の言語学は、1786年に古代インドの文語であるサンスクリットがギリシャ語やラテン語と共通の先祖から出ていると言われ、19世紀初めにそれが証明された時に始まった。このように2つ以上の言語の比較を行って、同系であることを確かめ、それらの系譜上の関係を解明し、音韻対応の規則を作ることなどが、言語学の目的と考えられた。比較言語学と呼ばれるのがそれである。19世紀を通じて、このような比較言語学中心の流れは変わらなかった。

言語学界に新しい波が起こったのは、20世紀になってソシュールが一般言語学の講座を担当した時からである。それまでの比較言語

学に対して、時間軸を動かさずに捉えた言語の体系・構造の研究（ソシュールのいう「共時言語学」）の意義を強調したからである。この学説は、一般言語学、構造主義言語学の発展を促した。とくにアメリカ合衆国で発達した構造主義言語学は、音韻の分析をはじめ言語構造の各分野にわたって、客観的で精緻な記述を進めた。しかし客観主義に徹したため、意味の分析には十分踏み込めず、形式と意味の不整合な部分については説明ができなかった。ここに登場したのが、N. チョムスキーの変形生成文法理論である。彼は、言語の表面的な形式や構造とは異なる深層構造を問題にし、すべての言語を記述しうるモデルを考えた。ある言語の話し手が文法的に正しい文を生成する時に用いる知識を規則の体系によって示すことを目的とする生成文法は、現在も、後継者や批判者の手で活発に研究され修正されながら、分化と発展をつづけている。

ところで、言語の観察や研究は、比較言語学が起こるまでにも長い歴史をもっていた。われわれの祖先は、未知の言語に遭遇し、母語でない言語の熟達に努め、時が経って理解できなくなった古代語の解明などに挑戦してきた。世界で最古と言われる文法書は前4世紀ごろに成立したパーニニの『サンスクリット文典』であるが、これは、宗教文献ヴェーダの言語とサンスクリットとの違いが意識されて書かれたものという。日本でも、720（養老4）年に編修された『日本書紀』に訓点^よが施されていなかったため、まもなく訓みを中心とする講義が開始されたと伝えられている。951（天暦5）年には、勅命によって、源順ら5人により『万葉集』に訓点を施す作業が行われた。

このような歴史を見ると、素朴な言語研究はすでに遠い昔に始まっていたと見なければならない。注意すべきことは、そのような研究が、よく分からない（もしくは分からなくなった）言語を対象にしたという事実である。

3 対 照 研 究

比較言語学がもっぱら同系統に属する複数の言語を研究するのに対して、同系か否かに関係なく複数の言語の類似点・相違点などを研究するのが**対照言語学**（Contrastive Linguistics）である。前節でも述べたように、人類は古語や外国語に接し、それらに触発されて研究を重ねてきたのであり、広義には、対照言語学は長い前史を有すると言えるのである。「対照言語学」と呼ばれるような自覚的ないとなみを問題にしなければ、このように2言語の対比は古くから行われていたのである。

言語学の1分野として自覚的に対照言語学が考えられるようになったのは20世紀後半のことで、具体的には、R. ラドーの *Linguistics across Cultures* (1957) からと言ってよい。ラドーは、副題「言語教育者のための応用言語学」が示すように、外国語教育に携わる教師に言語学の知見を与えることを目的とし、主に英語とスペイン語の音から文化にまでわたる対照分析を展開した。以後、対照言語学の著述が漸増し、H. Kufner (1962)『英語とドイツ語の文法構造』、W. Moulton (1962)『英語とドイツ語の音声』、R. P. Stockwell & D. J. Bowen (1965)『英語とスペイン語の音声』、R. J. Di Pietro (1971, 邦訳=1974)『言語の対照研究』などが発表された。「対照」という語を書名に用いたものは少なく、多くは「A語とB語の△△」といったタイトルになっているが、対照的な研究として位置づけられるものである。

日本でも事情は同じで、W. G. Aston (1879)『日鮮兩語比較研究』、小倉進平 (1923)『國語及朝鮮語發音概説』、オレスト・プレトネル (1926)『實用英佛獨露の發音』などがあったが、「対照」という語を冠した日本最初の言語関係書は、波多野鹿之助 (1953)『対照 国語学』であろう。日英対照は乾亮一、三戸雄一、喜多史郎、樺垣実などにより手がけられ、小泉保、國廣哲彌、影山太郎、中右実その他の人々によって精緻な研究が進められてきた。単独の論文